集英社版
世界文学全集

58

モーパッサン　女の一生 他

© 1977 Shueisha Printed in Japan

集英社版　世界文学全集　58

女の一生　他

一九七七年　九　月二十日　印刷
一九七七年　十　月二十日　発行

訳　者　斎藤昌三／手塚伸一
編　集　株式会社　綜合社
一〇一　東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話（〇三）二三九―三八一一

発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三〇―六三六一
販売部（〇三）二三〇―六一七一

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています

0397-168058-3041

目次

女の一生　斎藤昌三訳　3
ピエールとジャン　手塚伸一訳　217
後記・注解　353
解説　斎藤昌三　355
年譜　365

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

女の一生

ささやかな真実

ブレンヌ夫人*に

忠実な友としての敬意をこめ

そして今は亡き友を偲(しの)びつつ

ギイ・ド・モーパッサン

1

ジャンヌは荷づくりを終えてしまうと、窓辺に寄ってみた。が、雨はまだやんでいない。

激しい雨は、夜も休みなしに窓ガラスや屋根を鳴らして降りつづけていた。水気をいっぱいに含みこんで低く垂れこめた空が破裂して、水が地上に流れだしているような勢いである。地面は水浸しでどろどろになり、砂糖のように溶けてしまいそうだ。突風が重苦しい熱気を孕んで吹き過ぎていく。溝からあふれでた水の流れる音が、ひとけのない街路いっぱいに響いている。家々は海綿のように湿気を吸い、なかのほうまで湿気てしまって、地下室から屋根裏まで、壁はすっかり汗をかいている。

ジャンヌは、きのう修道院付属の寄宿学校を出たばかり、とうとう解放されて以後永久に自由の身になったというので、これまで長いあいだ夢みていた人生のさまざまな幸福をすぐにもこの手で捉えんものと意気ごんでいるのだった。お天気がよくならないと、お父さまは発つのをしぶるのじゃないかしら、心配だ。もう朝から百べんめぐらいにもなるのだけれど、晴れる兆が見えはしないかと、また地平線の彼方を眺めやった。

と、旅行鞄にカレンダーを入れるのを忘れていたことに気がついた。小さな厚紙のカレンダーを壁からはずす。月ごとに仕切られ、模様の真中に今年の年号が一八一九年と金文字で入っている。最初の四段を鉛筆で消し、五月二日まで、日ごとの聖人の名前の上に棒線を引いた。二日は修道院から出た日である。

ドアの向うで呼ぶ声がした。「ジャネット！」

「入ってもよくってよ、お父さま」とジャンヌは答える。父親が姿を現わした。

シモン＝ジャック・ル・ペルテュイ・デ・ヴォー男爵は、風変りでお人好しな、前世紀生き残りの貴族といった人物だった。ジャン＝ジャック・ルソーの熱狂的な信奉者で、田園や森や動物、自然に対して恋人のような情愛を抱いていた。

貴族の生れだから、本能的に九三年（フランス革命期、恐怖政治の開始された年）を憎む気持は持っているが、その反面、気質的には哲学者（十八世紀自由思想家・啓蒙哲学者の流れを汲む思想の持主）、受けた教育からいうと自由主義者だったので、専制政治を忌み嫌っていた。もっとも、この憎しみは、ごく無害な、口先だけのものにはちがいなかった。

男爵の最大の強みであると同時に最大の弱点でもあったのは、その善良さだった。愛撫し、与え、抱擁するのに、どう頑張っても手が回りかねるといった底抜けの善良さで

ある。造物主的な善良さとでもいうか、散漫で、骨っぽいところがまるでなくて、意志の神経がどこかで麻痺しているような、一箇所だけ精力配分の及ばないところがあるとでもいうような、一種の欠陥といっていいくらいの善良さなのである。

理論好きの人だったから、彼は娘のためにちゃんと首尾一貫した教育計画を練った。娘を幸福にしたい、善良で曲ったところのない、やさしい女にしたい、そう願ってのことである。

娘は十二歳まで家に置かれ、それから、母親の嘆きもよそにサクレ＝クール修道院の寄宿学校に預けられた。

父親はここに厳しく娘を留め置いた。閉じこめて外に出さず、人に会わせず、世の中のことは何一つ知らずにいるようにしたのである。娘が十七歳になったら、清浄無垢のまま自分の手もとに返して欲しい。そこで初めて、いわば健全な詩情の湯浴みを自らの手でさせてやりたかった。野に出て、豊沃な田野の真中で娘の魂を啓いてやりたい、素朴な愛の姿、動物たちの飾り気ない愛情、晴れやかな生の法則を目のあたりに見せて蒙を啓いてやりたい、とそういう考えだった。

こうして今、娘は、喜びに顔輝かせ、若々しい生命力と幸福に対する渇望に満ちあふれて、修道院から出てきたのである。所在ない昼や長い夜、独りひそかに未来への希望を育むあいだ、何度となく胸に描きつづけてきたさまざまの歓びや素晴らしい偶然の数々、それが現実のものとなる時を今や遅しと待ち構えているのだった。

彼女はヴェロネーゼ描くところの肖像画にそっくりだった。艶やかなブロンドの髪が、その色合いを肌に移して滲ませたかのようである。いかにも貴族的な肌は、ほんの心持ち薔薇色がかって、うっすらとした産毛で翳りを帯びている。薄蒼いビロードのような産毛は、日の光が肌を撫でると、ふっと仄かに浮き上がって見える。眼は青、オランダの陶器人形の眼のような、あの不透明な青だった。

左の小鼻の上に小さなホクロが一つあった。顎の右側にも一つ。顎のほうのホクロには、肌の色と似ていてほとんど見分けのつかない毛が二、三本縮れていた。背が高く、胸は豊かに成熟し、腰はしなやかにくびれている。はっきりした声音は、時として鋭すぎるようにも聞えるが、屈託のない様子で彼女が笑うと、周りがパッと明るくなる。よく両手を何の気なしにこめかみにあて、髪を撫でつけるような仕草をするのが彼女の癖だった。

父親に走り寄ると、彼女は抱きついて接吻した。「ね、出発するんでしょう？」と言う。

父親は頬笑み、すでに白くなった髪、かなり長く伸した髪を振ってみせる。そして、窓のほうを手で差し示しながら、

「こんな天気に旅なんかできるものかね」
が、娘は可愛らしくだだをこね、父親にせがんだ。
「ねえ、お父さま、発ちましょうよ、後生ですから。午後になったら、きっと晴れるわ」
「でも、お母さんが承知しそうにないよ」
「そんなこと、絶対、大丈夫、お母さまのことなら、わたしが引き受けるわ」
「お前がお母さんを説き伏せたら、わしのほうはかまわんよ」
娘は早速、男爵夫人の居間へとんでいった。それほどまでに、この出発の日をじりじりしながら待っていたのである。
サクレ＝クール修道院に入って以来、彼女はルーアンを離れたことがなかった。父親が自分の決めた年齢に達するまで一切の娯楽を禁じていたからである。二度だけパリに二週間ほど連れていってもらったことはあるが、これとて都会である。彼女の夢みていたのは田園のことばかりだった。
それが今、レ・プープルにある屋敷、イポール近郊の断崖に立つ先祖伝来の古い館で、ひと夏を過そうとしているのだ。海のほとりの自由な生活には限りない歓びが秘められているにちがいない、そう思うと期待に胸がはずむ。それに、この館は彼女に譲られて、結婚後はずっとここに住むことと今から話が決っているのである。
こういう事情だから、前夜来、絶え間なく降りしきる雨は、彼女にとって生れて初めての大変な悩みの種というわけだった。
が、数分もすると、彼女は母親の居間から駆けだしてきて、家中に響き渡るような大声で叫んだ。「お父さま、お父さま！　お母さまが承知してくださったのよ。馬を車につけさせてちょうだい」
豪雨はいっこうに勢いを弱めていない。かえって強くなったくらいだったが、そのなかを四輪馬車は玄関の前に横づけにされた。
ジャンヌがすぐにも馬車に乗りこもうとしているところへ、男爵夫人が階段を降りてきた。一方から夫に支えられ、もう一方からは、男のように逞しく頑丈な身体つきの、背の高い小間使に支えられている。この小間使、コー地方出身のノルマンディー娘で、十八歳になるかならぬくせに、たっぷり二十歳くらいには見える。小間使とは言うものの、家内では娘分に近い扱いを受けているが、それというのも、ジャンヌとは乳姉妹だからである。名をロザリーという。
それに、この娘の主な役目は、女主人が歩く時に介添役をつとめることだった。夫人は、数年前から心臓肥大症のためむやみに肥ってしまい、絶えずめそめそと病いの愚痴をこぼすのである。

男爵夫人は喘ぎ喘ぎ、この古びた館の玄関の石段のところまで辿りつくと、雨が川のように流れている中庭を見て呟いた、「どう考えても、むちゃというもんだわ」

夫のほうは相変らず頬笑みを浮べながら答える、「発ってもいいと言ったのは、あなたじゃないかね、アデライードさん」

妻がアデライードといういかにも大仰な名前なので、いくぶんからかい気味に恭しさのようなものを態度に表わし、いつも「さん」づけで妻を呼ぶのである。

やがて夫人はまた歩きだし、やっとのことで車に乗りこんだ。車のバネが一時に撓む。男爵はその隣にすわり、ジャンヌとロザリーは後ろ向きの席に腰をおろした。

料理女のリュディヴィーヌが抱えてきた何枚もの外套を、皆、膝にかける。それと、バスケットが二つ。これは脚の後側に押しこんだ。それから、料理女は御者台によじのぼり、シモン爺さんの隣に腰を落着け、頭からすっぽりと大きな毛布をかぶった。門番夫婦が出てきて、馬車の扉を閉めながら別れの挨拶をし、後から荷馬車で送ることになっている荷物について、もう一度、注意を受ける。そしていよいよ、馬車は出発した。

御者のシモン爺さんは、降りしきる雨のなか、頭を低くさげて背を丸め、三重襟の御者外套に深々とくるまっている。唸りをあげた突風が窓ガラスを打ち、路を水浸しにする。

馬車は、跑足で駆ける二頭の馬に牽かれ、勢いよく河岸通りへ下りると、大きな船の列に沿って進んだ。マストや帆桁や綱具が、枝を払った樹々のように、雨空に物淋しく突っ立っている。やがて、馬車はモン・リブーデの長い大通りに入った。

それから間もなく、馬車はいくつかの牧場を横切った。時折、ずぶ濡れの柳が、死骸のようにだらりと枝を垂らし、雨しぶきを透してぼんやりと浮き上がってきたりする。馬の蹄鉄は騒がしく水音をたて、四つの車輪が勢いよく泥をはねあげる。

皆、黙りこくっていた。大地と同じように、心までもがぐっしょりと濡れてしまったかのようだった。夫人は、軀をのけぞらせて頭を凭せ、瞼を閉じた。男爵は、雨に濡れた単調な田野を憂鬱そうに眺め渡している。ロザリーは、膝の上に包みをのせて、身分の低い者に特有の、あの動物じみた夢想に耽っていた。が、ジャンヌは、この生暖かい雨のなかで、閉じこめられていた植物が外気にあてられたかのように、息をふきかえした心地だった。深い歓びが、葉叢のように、憂鬱の気配に濡れないよう彼女の心を守っていた。口をひらきはしなかったが、彼女は声をたてて歌いだしたかった。手を外に突きだし、掌いっぱいに水を受けて飲みたかった。勢いよく駆ける馬に運ばれてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くことも、荒涼とした淋しい風景を眺めることも、こんなひどい雨のなかでちゃんとした蔽いに守られていることも、何もかも嬉しく楽しかった。

降りそそぐ雨に打たれて、二頭の馬の臀部はつやつやと輝き、湯気をたてている。

男爵夫人は、うとうとと眠りこんでしまった。ぶらぶら垂れ下がった規則正しい螺旋状の捲毛に囲まれた顔が少しずつ下にさがっていく。その顔を力なく支える恰好で、頸に三筋のたるんだ波形の襞が入り、その最後の肉の波打ちはたっぷりと広い胸の海に消えている。頭が呼吸のたびごとに持ち上がり、また、がっくりと垂れる。頬がふくれて、半開きになった唇のあいだから高い鼾が洩れてくる。夫は彼女のほうに身をかがめ、肉づき豊かな腹の上で組んでいる手のなかへ、小さな革の財布を置いた。

その感触に夫人は目を覚まし、眠りを中断された人に特有の、うつけた様子でぼんやりと財布を見つめた。財布は下に落ちて、口をひらいた。金貨や紙幣が馬車のなかに散乱した。そこで夫人は、はっきりと目を覚ました。ただでさえ気持の浮きたっている娘は、これを見てけたたましく笑いだした。

男爵はお金を拾い、夫人の膝にのせながら言った。「このお金、エルトの農場からあがったのはこれだけだ。レ・プープルの屋敷をちゃんと直すために、あの農場を売ったんだよ。これからはしょっちゅう、あの屋敷に住むことになるわけだからね」

夫人は六千四百フランを勘定し、落着き払って自分の隠しのなかにおさめた。

これは、双方の両親から相続した三十一の農場のうち、こういうふうに売り払われた九番目の農場だった。それでもまだ、およそ年二万リーヴルの地代があがるだけの土地を夫妻は持っていた。ちゃんと管理をすれば、年に三万フランは楽にあがろうという土地である。

夫妻は簡素な暮しをしていたから、これだけの収入で充分やっていけるところだったが、如何せん、この家には開きっぱなしで底なしの穴があった。人の好さという穴である。陽が沼地を干上がらせるようなもので、この穴が彼らの手から金を吸いとってしまうのである。流れだし、たちまちのうちに遠ざかり、消えてしまうという具合だった。どういうふうにして？　そこのところが誰にもわからない。いつも決って、夫妻のうちのどちらかがこんなことを言う、「どうしてこんなことになったのかわからないんだけれど、大したものを買ったわけでもないのに、今日、百フラン使ってしまった」

唯々として他人に与えることを惜しまない、これが彼らの生活の大きな楽しみとなっており、この点で二人の意見は何の齟齬もなく、人を感動させるくらいぴったりと一致

していた。
ジャンヌは訊ねた、「わたしのお屋敷、きれいになってるの？」
男爵は明るい声で答える、「今にわかるよ、娘や」
驟雨は次第に勢いを弱め、やがて、霧のような雨、埃が宙を舞うような細かい糠雨に変っていった。低く垂れこめていた雲の天井が高くなり、白さを増したように見える。と、突然、雲のどこに穴があいたのかはわからないが、陽の光が草原の上へ斜めに落ちかかった。
それから、雲が割れ、その底に青空が現われて、ヴェールが裂けていくように割れ目が次第に大きくなり、やがて、明るく深みのある青の、澄みきった美しい空がいっぱいに拡がった。
爽やかな優しい風が、大地の幸福な吐息のように吹き過ぎていく。馬車が庭や森に沿って進む時には、時折、羽を乾かしている鳥の活き活きとした歌声が聞えてきた。
夕暮れになった。車のなかの人たちは皆、眠りこんでいたが、ジャンヌだけは別だった。二度ばかり、宿屋で車をとめ、馬を休ませて、水と燕麦を少しやった。
陽はもう沈んでいた。鐘が遠くで鳴っている。小さな村にさしかかったころ、馬車のランプに火がともされた。空にも、たくさんの星がきらめきだした。明りのついた家がところどころに現われ、火の点となって闇を貫いていく。
そして、不意に、丘の向うから、樅の枝を透かして、赤い大きな月が眠りから醒めたばかりの仏頂面をのぞかせた。
暖かいので、馬車の窓は開けたままにしてある。ジャンヌは、もう夢想に耽ることにも疲れ、幸せな未来を想い描くことにも飽きて、ぐったりと軀を休めていた。時折、あまり長く同じ姿勢をとっていて痺れがきれると、彼女は眼をひらいた。外の景色を眺めてみる。薄明るい夜のなかを農場の樹々が行き過ぎたり、田畑のあちこちにねそべっている牛が頭をあげるのが眼に入る。それから、姿勢をあれこれと変えてみて、途中まで見た夢の続きを見ようとするが、絶えずごろごろと鳴り続ける車輪の音が耳について頭が疲れ、また眼をつぶってしまう。軀ばかりではなく、心までも疲れきっている、とそう感じた。
そうこうするうちに、車が停まった。手にランプをかかげた男や女が、馬車の扉の前に集まっている。着いたのだ。はっと目を覚ますと、ジャンヌはいち早く馬車から跳びおりた。父親とロザリーは、小作人の一人が明りをかかげるなかで、男爵夫人をほとんど抱きかかえるようにして連れていく。夫人はすっかり疲れきって、つらいといっては呻き、息絶え絶えの小さな声でのべつまくなしに、「ああ、やれやれ！　ほんとにすまないね、ほんとに」と繰り返した。何も飲みたくない、食べたくもないと言い、寝かされると夫人はすぐに眠りこんでしまった。

ジャンヌと男爵は差し向いで夜食をとった。
親子は互いに顔を見合わせて頬笑み、テーブル越しに手をとりあったりした。子供っぽい喜びに捉えられた二人は、修復された館のなかを見てまわった。
それは、農園と城館の合の子のような、あのノルマンディー独特の高く広々とした住いの一つだった。白い石づくりだが、その石も灰色に変色している。家の子郎党が全員、起居しても余りある広さを持った建物だった。
長く大きな玄関ホールが家を二つに分けて、一方から他方の端へ貫き通り、表と裏にそれぞれ大きな出入口がひらいている。両脇から階段が二つ、この出入口をまたぐように這いのぼって、真中が空いたかたちになっている。這いのぼってきた階段は、ちょうど橋のように、二階で出会っていた。
一階の、右手を入ったところが、とほうもなく広い客間で、ここには小鳥がむれ騒ぐ葉叢の模様の壁掛けが張りめぐらされている。家具はすべて細目針で刺繍した布で張ってあるが、その図柄は全部、そっくりそのままラ・フォンテーヌの『寓話』の絵解きになっている。子供のころ好きだった狐と鶴の話の描かれた椅子を見つけ、ジャンヌは嬉しさに胸をふるわせた。
客間の隣を入ると、古い本のいっぱいつまった図書室、それに、今は使っていない部屋が二つある。左手には、壁板をすっかり新しく張りかえた食堂、敷布や卓布や下着類をしまっておく部屋、食膳支度室、台所、浴槽のついた小さな部屋があった。
二階の端から端へ縦に廊下が通っている。この廊下に沿って、部屋数が十、十のドアがずらりと並んでいる。その一番奥の右側がジャンヌの部屋だった。二人はその部屋に入ってみた。男爵は、使いみちもなく物置にしまってあった壁掛けや家具だけを使って、この部屋の模様変えをしておいたのだった。
フランドル産の大そう古い壁掛けに描かれた奇妙な群像が、この部屋をにぎやかに飾っている。
自分の寝台を目に留めると、若い娘は歓びの声をあげた。柏の木でできた四羽の大きな鳥が四隅にひかえて、真黒な軀を蠟光りに光らせながら寝床をしっかりと支え、番人役を引き受けているように見える。側板には、花と果実をあしらった太い花綵模様が刻みこまれている。精巧な溝彫りのある四本の支柱は、頂にコリント式の柱頭を持ち、薔薇とキューピッドがもつれあう床の枠縁を支えていた。
寝台はどっしりとした威容を見せて据え置かれているが、年月を経て木肌がいかめしく黒光りしているにもかかわらず、いかにも優雅な趣を失ってはいなかった。
ベッド・カヴァーと天蓋は、二つの天空のように美しくきらめいていた。どちらも濃紺の古代絹でできていて、と

ころどころに金色の刺繍でかたどった大きな百合の花が星のようにちりばめられている。

ためつすがめつ寝台を眺めたあと、ジャンヌは明りを高くあげ、壁掛けに描かれているのは何の絵だろうと、仔細に見なおしてみた。

若い貴族と若い貴婦人が、緑、赤、黄と、色とりどりの実に奇妙な身なりをして、白い果実がたわわに実っている青い樹の陰で語りあっている図だった。果実と同じ色の大きな兎が灰色の草をちょっと食べかけているところである。

二人の人物のちょうど上のあたり、絵のなかではそれが後ろのほうの離れた場所ということになるわけだが、そこに、屋根の尖った丸い小さな家が五軒見える。そして、その上、ほとんど空の真中に、真赤な風車がある。

花を図案化した大きな枝状の模様が、これらの人や物のあいだを縫ってうねっている。

他の二つの壁面も最初のものと大変よく似ていた。ただ、フランドル風の身なりをした四人のちっちゃな男たちが家から出てきているところだけは違っていた。彼らは、驚きと激怒を示す体で、両手を空に向かってあげている。

が、残る最後の壁掛けには、いかにも劇的な情景が描かれていた。相変らず草を食んでいる兎のそばで、さっきの若い男が倒れているが、どうやらすでに息絶えているらしい。若い貴婦人は、彼を見つめながら、剣で胸を刺し貫いている。樹に実った果実も黒くなっていた。

ジャンヌは、何の絵なのかとてもわかりっこないと諦めかけたが、その時、絵の片隅に一匹のごく小さな動物がいるのが目に入った。兎が本当に生きていれば、草の芽のように食べてしまえるくらいの動物。ところが、なんと、それはライオンだった。

そこで、彼女にも、ピュラモスとティスベの不幸な物語*を描いたものだとようやく合点がいった。絵の稚拙さに微笑を浮べずにはいられなかったけれど、こんな恋物語の絵がぐるりと周りを囲っているということを嬉しく思った。この絵は、これまで抱きつづけてきた希望を絶えず彼女の胸中に掻きたて、この遠い昔の愛の伝説でやさしく彼女の眠りを包んでくれることだろう。

そのほかの家具はみな、雑多な様式をごちゃまぜにしたものだった。古い家に特有の、親の代から子の代へと次から次へ受けつがれてきた家具ばかりで、こういうもののために、古い家は何もかもがいっしょくたに寄せ集められた一種の博物館と化すわけである。ルイ十四世様式の見事な箪笥は、ぴかぴかに磨かれた銅で鎧われ、その両わきに、いまだに当時の花模様の絹が張られたままのルイ十五世様式の肘掛椅子が二脚あった。ローズ・ウッドの書き物机が暖炉と向かい合わせに置かれ、その暖炉の上には、丸いガラス蔽いに入った帝政時代様式の置時計がある。

これは、蜜蜂の巣のかたちをしたブロンズの時計で、金色の花咲きみだれる庭園の上に、四本の大理石の柱で支えあげられている。細長い割れ目から巣の外へ突き出ている細い振子が、この花園の上に、七宝の羽を持つ小さな蜜蜂を絶えずぐるぐると飛びまわらせている。

文字板は極彩色の陶製で、巣の横腹に填めこんであった。

この時計が十一時を打ちはじめた。男爵は娘に接吻し、自分の部屋へ引きあげた。

そこで、ジャンヌも、名残り惜しい気持はやまやまながら、床に就かないわけにはいかなかった。

これが最後と、彼女は部屋のなかをもう一度ぐるりと見まわし、それから、蠟燭を消した。が、頭のほうだけ壁にくっついた寝台の、左側にひらいた窓から月の光が波のように流れこみ、光り輝く水溜りを床にひろげた。

光の反射が四方の壁にとび散り、蒼白い光のゆらめきがピュラモスとティスベのじっと動かない愛の姿を弱々しく愛撫している。

もう一方の窓、足もとのほうの真向いにある窓を通して、やわらかな光にとっぷりと浸された大きな樹がジャンヌの目に入った。寝返って横向きの姿勢になり眼をつぶってみたが、しばらくすると、また彼女は眼をひらかずにはいられなかった。

まだ車の動揺にゆられているような気がする。車輪が頭のなかでごろごろと鳴り続けている。最初のうちは、軀を動かさないようにして、こうやってじっとしていればそのうち眠りこんでしまうだろうと当てにしていたが、はやる気持がやがて軀全体に伝染していった。

脚がひきつり、しだいに全身が熱っぽくなってくる。仕方なく、起き上がり、裸足のまま、腕も剝きだしのままで、幽霊じみた恰好に見える長い寝間着に身を包んで、彼女は床の上にひろがった光の沼を踏み渡ると、窓をあけて外を眺めた。

大変に明るい夜だから昼間のようによく物が見える。昔、まだ小さな子供だったころに好きだったこの地の何もかもが、彼女には見覚えのあるものばかりだった。

まず、正面に見える広々とした芝生。これが夜の月明りに照らされてバターのような黄色を呈している。館の前、両の突端に二本の巨木がそびえたっている。北側の樹はプラタナス、南側のは菩提樹だった。

広い芝生の拡がりが尽きるところに、ちょっとした庭木の林があって、それがこの館の地所の端になる。さらに、この地所全体を五列に並んだ楡の古木が護っている。楡は、常時、激しく吹きつけてくる潮風にねじれ、樹肌を削がれ、侵蝕され、屋根のように斜めに葉を刈りこまれている。

この一種の林苑は、とほうもなく丈の高い白楊樹、ノルマンディー独特の言い方をもってすればプープルの、長い

二筋の並木道で左右両側を限られている。この並木道が、地主邸とその隣の二つの農場とを隔てていた。一方の農場にはクイヤール一家が、もう一方にはマルタン一家が住んでいる。

このプーブルという樹の呼称が、転じて館の名称となっているわけである。囲いの外には、はりえにしだの疎らに生えた未開墾の広大な野原が拡がり、夜となく昼となく海風が鋭い唸りをあげて吹き荒れている。そして、急激になだれ落ちた岸が高さ百メートルの切り立った断崖となって、その裾を波が洗っているのである。

ジャンヌは、波のかたちが模様となって浮きだした果てしのない海面を、遙か遠くに眺めやった。星明りのなかで、波は眠ったように静かだった。

太陽が姿を隠したこの穏やかな世界には、大地のあらゆる匂いが拡がり満ちていた。下の窓のまわりを這いのぼっているジャスミンがきつく匂う吐息を放散し、もっと微かな若草の匂いと混じり合っている。時折、吹きつけてくる緩い風が、塩気を含んだ空気と、海草のべとべとした汗の強烈な匂いを運んでくる。

若い娘はまず、思う存分、好きなだけ深呼吸した。田園の安らぎに浸ると、さっぱりと水浴びをしたあとのように、気持が落着いてくる。

夕暮れが来ると目を覚まし、静かな夜の闇に隠れて密やかな活動を開始するさまざまな動物たちが、薄暗がりのなかで音もなく蠢いている。鳴声もたてない大きな鳥が、しみのように、影のように、宙を飛びさっていったり、見えない虫の羽音だけが耳もとをかすめ通ったりする。たっぷりと露を含んだ草の上やひとけのない砂路を横切って、声もなく走りまわっているものの気配が感じられる。

ただ、憂鬱そうな蟇が数匹、月に向かって短く単調な歌声をあげているばかりだった。

ジャンヌは、自分の心がこの明るい晩のようにさまざまのざわめきに満ちて、大きくふくらんでいくのを感じた。周りで密やかな音をたてている夜の動物たちにも似て、落着きのない無数の欲望が不意に群をなして蠢きだしたようだった。心の内と外に相似た状態が醸しだされた結果、彼女はこの生動する自然の詩とぴったり一体となった。夜のやわらかな仄白さのなかに、人間界を超えたものの戦慄が走り過ぎ、摑みどころのない希望、幸福の息吹きといったようなものが鼓動している気配を彼女は感じとった。

彼女は恋について、あれこれと夢想に耽りはじめた。

恋！　二年このかた、近づいてくる恋の予感に、彼女の心は徐々に高まる不安でいっぱいだった。それが今、とうとう自由に恋をしても構わない身となったのだ。ただ、めぐり会いさえすればいいのだ、恋する人に！

どんな人だろう？　自分でもはっきりと思い浮べること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com